

幕末福井藩の明君、 松平春嶽の先進性

「自転車とりんご」



松平春嶽肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

幕末福井藩の明君、松平春嶽は「日本初」のエピソードが二つあります。

一つは、乗り物に関するものです。福井藩資料や越前松平家・福井藩校に伝来した書籍など、一万点を超える資料群からなる「松平文庫（福井県立図書館保管）」の「御用日記」をひも解くと、文久2（1862）年2月6日に、「自転車」に関する記述が出てきます。

「佐々木権六がビラスビイデ独行车の組立てを行い、側近の中根雪江も立ち会う中、馬場で試乗した」。



佐々木権六（長淳）肖像
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

※「ビラスビイデ」は、フランス語で速い乗り物を意味する「ペロシビード」がなまった言葉とされています。

春嶽が「ビラスビイデ独行车」という自転車に乗ったとの記載で海外から伝来した自転車に日本で初めて試乗した記録といわれています。春嶽は相当気に入り、その後もたびたび試乗し、夫人勇姫がその様子を守っていた記録も残っています。

自転車（実際は三輪自転車）で横浜で荷揚げされたといわれる）を組み立てたのは福井藩士の佐々木権六（長淳）で、権六は、自転車以外にも洋式の鉄砲や帆船などの建造に携わり、モノづくりの分野で活躍しました。由利公正とともに武器・弾薬製造の責任者となり、分業による効率化により製造費を削減したほか、新政府で製糸・紡績業の発展に尽力したことで知られる人物です。

もう一つは、りんごの栽培に関するものです。春嶽が、幕府の政事総裁職をしていた文久2（1862）年、アメリカからリンゴの苗木を取り寄せ、江戸巢鴨の福井藩下屋敷に植えたという説があります。この経緯を明らかにする史料は現在のところ見つかっていませんが、当時を知る農務官僚（博物学者）の田中芳男氏が講演会（大正2（1913）年）で次のように回想しています。『巢鴨下屋敷には180センチメートルほどに育った西洋りんごが20〜30種あった』。越前公はそういうことは分かった方であったから、外国より取り寄せられたに違いない」と。この証言から、巢鴨下屋敷の栽培が西洋りんごの渡来を確認できる最も早い事例と考えられています。

現在の「ふじ」や「つがる」など国産の品種の先祖は、明治4（1871）年、北海道開拓使次官の黒田清隆がアメリカから持ち帰った苗木（「紅玉」や「国光」など）で、春嶽が取り寄せた苗木ではありませんが、日本における西洋りんごの栽培史に春嶽の名はしっかりと刻まれているのです。

「幕末の四賢侯」と呼ばれ、「明治」の元号を提案したともいわれる春嶽。先進的な考え方で新しいものを取り込み、挑戦する生き方は、二つの「日本初」にもうかがい知ることができます。

関連史料・ゆかりの地

福井神社



幕末四賢侯の一人、福井藩主、松平春嶽を祀る福井神社。戦災後、福井大学工学部の設計により再建され、一般の神社とは異なる特徴的な外観を持っています。拝殿の左手には、椅子に腰掛けた春嶽の像が鎮座しています。

【住所】福井市大手3-16-1（JR福井駅より徒歩9分）

参考資料等

『御側向頭取御用日記』（松平文庫（福井県立図書館保管））
柳沢美美子「福井藩巢鴨下屋敷のリンゴをめぐる」『福井県文書館研究紀要』第7号